



特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡Ⅷ

昭和51年度
発掘調査
整備事業概報

福井県教育委員会
朝倉氏遺跡調査研究所

目 次

はじめに

第18次調査	1
第19次調査	9
第20次調査	10
整 備	16
庭訓往來の断簡	17
研 究 所 要 項	18

P L. 1	第18次調査・出土遺物	第1図	発掘調査・環境整備位置図
P L. 2	第17次調査・遺構・同整備状況	第2図	第18次調査・遺構全測図
P L. 3	第18次調査・遺構	第3図	第18次調査・遺構
P L. 4	第18次調査・遺構	第4図	第18次調査・遺構
P L. 5	第18次調査・遺構	第5図	第18次調査・遺構
P L. 6	第18次調査・遺構	第6図	第18次調査・遺物
P L. 7	第18次調査・遺構	第7図	第18次調査・遺物
P L. 8	第18次調査・遺物	第8図	第18次調査・遺物
P L. 9	第18次調査・遺物	第9図	第20次調査・遺構全測図
P L. 10	第18次調査・遺物	第10図	第20次調査・遺構
P L. 11	第19次調査・遺構	第11図	第20次調査・遺物
P L. 12	第20次調査・遺構	第12図	第20次調査・遺物
P L. 13	第20次調査・遺構	第13図	第20次調査・遺物
P L. 14	第20次調査・遺構	第14図	第20次調査・遺物
P L. 15	第20次調査・遺物	第15図	環境整備
P L. 16	第20次調査・遺物		
P L. 17	第20次調査・遺物		
P L. 18	第20次調査・遺物		
P L. 19	環境整備		
P L. 20	環境整備		
P L. 21	庭訓往來の断簡		

は　じ　め　に

昭和42年に諏訪館跡、南陽寺跡、湯殿跡の各庭園の環境整備を行って以来10年たち、この間皆様の終始変わらせぬご協力をいただきまして、第2次5ヶ年計画も、ほぼ予定通り完了することができました。この10年間の発掘調査、整備事業によって、朝倉氏の館跡、家臣団の屋敷跡及び町並、寺院跡等を明らかにし、またその標示に大きな成果をあげることができました。

この成果を皆様に知っていただこうと、県立岡島美術記念館のご好意によって、特別史跡「一乗谷朝倉氏遺跡」発掘整備事業10周年記念展を開催しましたところ、おもわぬ好評を博しました。

本年度の発掘調査は、瓢町、共同墓地予定地、出雲谷の3ヶ所について行い、武将達の日常生活の一端を、また中世建築物の多様性を語る貴重な資料を得ることができました。

環境整備事業は、寺院跡と館前について行いました。これまで実施した整備は戦国時代の町並や生活の理解に役立っていると思いますが、これからも施工方法や標示に十分配慮し、また憩いの場として一層の充実を計り皆様のお役に立ちたいと思っております。

なお、今年度事業の実施にあたりまして、文化庁、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査研究協議会、奈良国立文化財研究所、福井市教育委員会の関係各位のご指導とご協力をいただきました。また、城戸ノ内をはじめとする地元皆様の調査、整備事業に対するあたたかいご協力に心から感謝の意を表しまして、発刊のごあいさつといたします。

昭和52年3月

朝倉氏遺跡調査研究所 河原純之

第18次調査（瓢町）

今年度の発掘調査は、従来の城戸ノ内中心部から北へ離れた地点に重点をおき、第18回は福井市城戸ノ内町字瓢町、面積約2500m²について発掘調査を実施した。調査は、昭和51年4月1日より始め、同年7月28日をもって発掘作業並びに一部の立面図、土層図の作成を終え、その後、好天候をまって、同年8月23日より3日間をかけ、空中写真測量を実施した。それをまわって同月27日竊などの遺物収容作業を行い、すべての発掘作業を完了した。

今回の調査は、「瓢町」（ふくべまち）という字名の特殊性に注目し（谷内の字名・通称は一般的に家臣団等の名にちなむもの、寺院等にちなむものである）、また、この地の地割も他の地区に比し、比較的小さく不規則であるため、他の調査地区との相異点が遺構・遺物等から裏付けられるか否かという点に主眼をおいた。調査の結果、遺構・遺物共にあまり残存状況も良好とはいえず、そうした可能性を含め、現在は出土遺物等の整理・検討中である。以下その調査概要を報告する。

発掘された遺構 PL. 3～7 第2～5図

調査地は、東の一乗谷川へ向って段状に傾斜し、西の山裾から舌状に張り出す2つの微高地に挟れている。この中の水田畦畔等を考慮し、東西60m・南北40mの発掘区を設定した。また町割等の確認のため東・西・南へ各2本のトレンチを設けた。発掘・実測方位は真北に対し北で約16°東へ振れているが、以下では発掘・実測方位に従い、山側を西、川側を東として記述する。

調査の結果、検出した主な遺構は、道(通)路3、石積溝28、井戸6、石積施設9、礎石建物6等である。発掘区の中は3段に分かれ、そのため遺構が分断されることが多い。しかし大別して3時期に分けられる点は他の調査と同様である。ここで全体の層位関係にふれておく。まず第I期とは、ここでみる最古の遺構群であって、道路SS621とはかなりの方位のずれを持って東へ流れる溝SD638・647等に代表される。これらの示す方位と西部上段にみられる溝等の遺構群との間にはかなりのずれ（約16°）がみられる。しかし、SD630の東端は、SD638・639に合流しており、同時並存期のあったことは確実である。第II期遺構群は、西部においては、SD630の存続期までをさす。東部では、大半が削平されており、一部SD651等を残すのみである。第III期とは、SD630が廃絶し、新たにSD633が設置された時期であって、SX706・709・710等に代表される時期であり、これが朝倉氏滅亡時まで存続した。東半においては、第II・III期については不明な点が多い。西半においては、第II・III期共に、嵩上げされた様子が顕著である。以上の様に、時期区分し、主要遺構について概説する。

SS 621 発掘区の南辺に沿って検出された東西方向道路である。第I期から第III期まで存続するとみられるが、東半においては第III期に当る上層は削平されたようである。トレンチによ

って確認した所見によれば、その幅は側溝を含め約6m（道路面は約5m）であり、中程に幅約2mの砂利敷面S X 698を持つ。（同様の遺構が第17次調査において検出されている。）

SS 622 発掘区西端で一部検出された砂利敷遺構で、南北方向道路とみられる。現時点では第III期面のみを検出である。道路幅は約5mとみられるが不明な点も多い。

SS 623 東北部で検出された遺構で第I期に属する。小砂利面、境界を示すとみられる石列がみられ、また側溝S D 647を持つことから屋敷内の通路と考えられる。幅は約1.2mである。

SD 624 道路S S 621の側溝で、道路北辺に沿って西から東へ流れる。現在は1～2段の側石を残すが、S S 621と同様、東半においては上層の削平が考えられる。第I期から第III期の遺構であろう。中央付近で道路S S 621を横断してきた溝S D 625と合流し、幅が倍となる。すなわち合流前は約20～30cmであるが、合流後は80～90cm幅となる。これまで検出された溝の中で最大級の幅を持つ溝である。

SD 627 南西部に位置する第II・III期の遺構である。西端から東へ向って約6m流れ、北へ折れ直に再び東へ約5m流れ、再び北へ向い、段の中心から先は不明となる。幅約20cmである。

SD 628 S D 627の北約5.4mに位置し、同様に東へ流れ、南へ折れS D 627の曲折部に合流する。このS D 627・628の2つの溝と西を走ると考えられる道路S S 622によって、ほぼ方形の区画を形成し、この中には数個の礎石も検出されている。

SD 629 西半のほぼ中央を西から東へ流れる溝で、第I期から第III期まで存続する。ほぼ中

主要遺構時期別一覧表

遺 構 番 号	期 別			遺 構 番 号	期 別		
	第I期	第II期	第III期		第I期	第II期	第III期
S S 621	■■■■			S D 648		■■■■	
S S 622		■■■■	■■■■	S D 649	■■■■		
S S 623	■■■■	■■■■		S F 680	■■■■		
S D 624	■■■■	■■■■		S F 681～683	■■■■	■■■■	
S D 625・626	■■■■	■■■■		S F 684～687	■■■■	■■■■	
S D 627・628		■■■■	■■■■	S E 674		■■■■	
S D 629	■■■■	■■■■	■■■■	S E 675			■■■■
S D 630	■■■■			S E 676	■■■■	■■■■	
S D 631		■■■■	■■■■	S E 677～679	■■■■	■■■■	
S D 633・634			■■■■	S X 706			■■■■
S D 637・638	■■■■	■■■■		S X 709・710			■■■■
S D 639・640	■■■■			S X 714		■■■■	
S D 641	■■■■			S V 696			■■■■
S D 642・643	■■■■	■■■■		S B 670	■■■■	■■■■	
S D 645		■■■■		S B 672	■■■■		
S D 647	■■■■			S B 673	■■■■		

間で屈曲する点も S D 627と同様である。かなりの深さを持ち、嵩上げしながら使用されたと考えられる(第5図参照)。段の所で削平されその先は不明となる。幅は約20cmである。

S D 630 S D 629の北に位置し、西から東へ流れる第 I・II期の溝である。この溝は、唯一下段の遺構面と連続し、全体的時期関係を決めるポイントとなった。すなわち東端で S D 639と合流する。この溝を I・II期とし、上層を III期として時期を定めた。幅は約20cmである。

S D 633 S D 630のすぐ北に位置し、ほぼ平行して西から東へ流れる。I・II期の S D 630に代って III期に設けられた溝である。幅は約20cmである。中央付近で多量の土鈴が出土した点は注目すべきであろう。

S D 638 北方から南へ向って流れ、ほぼ中央で屈折して東へ流れる第 I期の溝である。当初は S D 639を通してほぼ直進していたと思われるが、後世一部屈折させ現在みる形となった。理由は明らかでない。幅は約30~40cmである。

S D 641 S D 638の南北方向部とはほぼ平行して流れる第 I期の溝である。南から北へ向って流れていた様子もみられるが不明な点もある。この溝と S D 638の間(約9m間隔)の区画は、多量の土師質土器片を含む土で整地(埋土)されていて、その厚さは30~40cmにおよぶ。

S D 647 S D 638の東西方向部とはほぼ平行するように西から東へ流れる第 I期の溝である。北辺に前述の通路 S S 623が位置している。この溝と S D 638に挟れた区画内では、後世の削平のため一部の検出ではあるが、かなり整った礎石建物遺構 S B 670・672・673の3棟がみられる。

S B 672・673 東北部で検出された第 I期の礎石建物である。この2棟は隣接して建つ。規模等不明な点も多いが、ほぼ5尺を規準として計画されていたとみられる。方位は、ここを区画する S D 638・647と同じとみられる。また、S B 673の西辺には幅約1.2mの通路状の砂利敷遺構 S X 733が存在し、この遺構の西辺は S B 672の現存礎石列と一致している。

S E 674・677・679 井戸は6基検出されているが、崩れたりしているために底の確認が困難な3基を除き、この3基を完掘した。いずれもかなり深く、5~6mを計る。いずれも石積で、底は、かなり強固な岩盤面となり、そこから積み上げられている。立面図については、現在実験的に写真測量の応用を試みている。

S F 680~688 石積施設である。深さ30~50cm、方形を呈する。用途ははっきりしない。ほぼどの調査区においてもみられる遺構である。一般に溝・屋敷周辺に集中して存在するもの、建物に隣接するものに大別される。貯蔵穴とか、溜槽等の要素をもつと考えられる。またこれらのうちいくつかは、何らかの上部構造を有したと考えられる礎石様の石を四隅に持っている。

S X 706・714 越前焼の甕が連続して配置された遺構である。S X 706は第 III期、S X 714は第 II期に属する。S X 706は甕の底部が6個現存しており、さらに底部の圧痕が2個存在する。それらはほぼ90cmグリッドで配されている。すなわち東西2.7m、南北3.6mとなる。甕の肩部最大径はほぼ90cmであることから、密接していたとみられる。ここでは、10個体程度分の甕

の出土があるとみられるが、正確な個体数は今後の遺物整理の結果をみなければわからない。周囲に礎石も数個みられることから何らかの上部構造が考えられる。何かの貯蔵庫と考えられる施設である。S X 714も同様の間隔をもって襖が並んでいる。

S X 709-710 笏谷石（火山礫凝灰岩）切石を配した第Ⅲ期の遺構である。S X 709は火使用の施設とみられ、16～20cm×22～28cm×35～40cmの笏谷石を径約1mの円形に配している。石は強く火を受けていて、また焼土が多量に存していた。あるいは同規模の施設が南北に2つ並んでいたとも考えられる。S X 710はあまり火を受けた様子はみられず、内部に笏谷石製鉢（径64cm、深さ16cm）を配する。用途は明かでないが、1つの考え方として、S X 709をカマド、S X 710を灰等のかき出し場とみることもできよう。またこれらは周囲の礎石上に建つ建物内に存在したと考えてよからう。

以上、主要遺構について概説してきたわけであるが、最後に全体を通して若干の考察を加えまとめとする。

この地区には、これまで調査してきた他の武家屋敷にみられない、2・3の注目すべき特徴が認められる。第1は、多数の溝とその小さきみな屈曲にある。また、直ちには一屋敷として断定出来ないが、この区画内は、かなりのレベル差をもって利用されていた点も一つの特徴である。まず、溝が、屋敷を区画するS S 621とかなりのずれを持って配されている点を考えてみよう。一面には、やはり周囲の地形に制約されたとみられる。すなわち、西の山裾は、緩かに舌状となって、この地区の南北に張り出し、東面のみ一乗谷川（北へ向って流れる）に向けて緩傾斜をもって開けている。このことから、全体的に水の流れが東へ向い、多少北へふれる点は理解できる。しかし、何故、途中で小さく屈曲するのか不明である。建物等の配置に関連すると想定されるが、遺構の残存状況が悪いためなんともいいがたい。こうした全体的状況とともに注目すべき点がある。それは、西の上段の遺構群である。S X 706に代表される様に、越前焼の襖がかなりまとまって、規則をもって配されており、倉庫の要素がうかがわれ、また、S X 709・710にみられるように、カマドとみられる遺構が存在する。そして井戸もみられ、これらが、溝で小さく区画されている。こうした点を合せて考えてみると、この一面は、台所等を中心とする、きわめて日常生活臭の強い何かを感じさせる。こうした遺構が群として検出された点は重要であろう。

ここで、最後に、今回の空中写真測量にふれておこう。写真測量は他の測量に比し、作業が迅速で精度にむらがなく、また写真により種々の観察・判読が出来る等の利点を持っており、最近各種の文化財調査に応用されている。今回は、好天を待って昭和51年8月23日より基準点測量を行い、25日ヘリコプターによる空撮を行った。成果として $\frac{1}{50}$ 、 $\frac{1}{60}$ の縮尺の平面図を得た。作業はアジア航測株式会社が行った。作業器械のデータは下記の通りである。

撮影ヘリコプター 川崎ベルKH-4型JA7564

撮影カメラ 西独ツアイス社製RMK-A15/23

図 化 機 スイスウィルド社製オートグラフA-7

当遺跡における航空写真測量は今回が初めてのことであり、経験不足からくる改善の余地もみられるが、そうした点は、今後克服出来ると思われる。

発掘された遺物

第18次調査の結果発掘された遺物は、越前焼、土師質土器、青磁、白磁、染付等の陶磁器類を中心とし、これに少量の金属製品、石製品、木製品を伴う。現在資料整理が未了であり、数量的には不明だが、全体的な遺物の組み合わせは、これまでの調査と大差がないと考えられる。

以下、各々について、その概要と、2、3の気づいた点を述べたい。

越 前 焼 PL. 8、第6図

甕は、SX 706、713、714、731等、腰まで埋設した遺構より出土した大甕が主である。PL. 8-1は、SX 706、2はSX 731出土のもので、ともに口径80cm弱、器高90cm程の大甕で、2石弱の容量をもつ。越前焼の大甕は幅7cm程の「たたら」と呼ばれる帯状の粘土の積上げによって作られる。これらの甕では約16段を積んでいる。また、肩に「本」字と格子目を組み合わせた押印と、へら書きの記号をもつのが原則である。具体的な用途は不明だが、1の甕には、ヒビの部分に和紙と漆で目張りしてあり、液体を入れたことは明らかである。

壺は、中形のものが多い。第6図3、4は、井戸SE 677の底より出土したもので、いずれも5-6段の紐作りである。4は、底に下駄印と呼ばれる回転台の痕跡を残す。小壺では従来「お歯黒壺」と呼ばれる双耳壺が、注意されているが、5、6のように肩の張った、ずんぐりとした器形のものがかなりあることがわかる。口縁は中形の壺同様、2条の凹線をもち、6のように弱い片口をなす例もある。これらの壺も5-6段の紐作りで成形され、肩にへら書きの記号をもつ。

撞鉢、浅鉢は、概報VIやVIIで述べてきたような、一乗谷では一般的なものが主体のようである。

籠桶は、PL. 8-7のように、木製の桶をまねて作られている。口径23.5cm、器高15cmで、胴にタガとして2本の紐がめぐる。上の紐は断面3角形、下は、指頭により上下から交互に押さえて波状をなす。また口縁も内と外から交互に押さえ、ひだをなしている。

薬研は、概報VIIで述べた武家屋敷出土例と同形の破片が1例認められる。「サイゴ一寺」でも2例あり、一乗谷では、少数ではあるがそのセットの中にいつも存在するようである。

挿図1は、越前焼の大形の壺の肩部の破片で、へら書きの文字が認められる。「□仁六□」と読め、意味は不明である。一乗谷内の越前焼で、略号や花押状のへら記号以外のへら書きを



挿図1 越前焼線刻銘拓本

土師質土器 PL. 9 第6、7図9~36

土師質土器が最も多く、特に石組溝 S D 639、S D 638、S D 641に囲まれた地区より大量に出土した。その組成比は不明ながら、主体をなすのは、従来の分類に従えば、B、C、D類と観察できる。この中で、今までに確認された法量を大きく外れる例を認めた。第6図9は、D₂類とした整形技法の延長上に製作されているが、口径36.7cm、器高5.2cmと非常に大きい。同様の破片は数個体分が確認されており、1尺以上にもなる大形のグループがあると思われる。一方、第7図27は、B類の小皿に属すが、口径2.9cm、器高0.9cmと非常に小さい。タール痕も認められず、また法量からも実用品とは考えにくいものである。24、25もG類に分類できるが、口径6cmに集中していた従来の法量を上回り、また調整も粗雑になっている。今後の類例の増加をまって検討したい。

土釜は、19、20に代表される。器形の細部に若干の差はあるが、技法、法量共に標準的なものである。今回出土した土釜の中、5例の口縁部に、へら書きの記号が認められる。19のように井枠状のもの3例、20のように2本線のもの2例であり、後者と同じ記号は、サイゴ寺出土例や、武家屋敷出土例（概報Ⅵ）に見られる。また、今回は、土釜の出土数が多いことも注意され、現在までの整理による50個体にさらに増加すると考えられる。

壺は、大形のもの（21、22）と小形のもの（23）とがあり、いずれも手づくねで作られ、口縁部のみをナデている。21は外面胴部が、細かく剝離している。

器台又は手焙 34は低い高台をもち、羽釜のようなつばと口縁をもつ。全体は手づくねで作られ、口縁、つば、高台をナデつけている。用途は不明だが瓦質陶器には、少し大きい、よく似た器形のものがあり、火を用いている。同様のものと推定される。

28~30は、いずれも土師質土器の脚部で、上部には浅い杯部がつくと思われる。粗末な手づくねで、先端部だけをナデている例が多い。図示した3種類があり、中でも29が多い。用途は不明だが、灯明皿をのせる燈台の可能性をもつ。

もつのは、サイゴ寺出土のへら書きによる略画2例と、本例のみである。前者は、既に述べたように藏骨器と考えられる。

第6図8は、無頸壺で、おそらく水指と考えられる。胎土は非常に鉄分が多く、よく焼き締まっている。全体をロクロで成形しており、内面にはその痕を残す。越前焼と似ているが、他の産地の製品の可能性が強く、現在、胎土分析を行っている。

皿又は杯に3足をつけたものが数例認められる。これには、31のように粘土玉をつけた簡単なものと、33のように瓦質香炉の3足と同形に丁寧にはりつけたものがあり、後者は大形に多いようである。

35は天目茶碗を模したような碗形で、口縁部もかえりをもつ。26は、小皿の口縁を指頭で、内側につぶして装飾としたもので、共に1例だけの特殊な器形である。

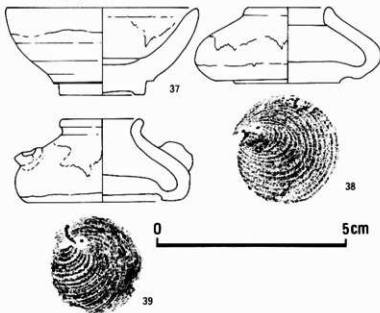
36は土鏝で、重さ73.2g、中央に丸棒であけた直径0.6cmの穴が貫通する。

PL. 9上段は、歪ませた粘土板をそのまま焼いたもの(10~13)、粘土玉の中央を少し指で凹ませたもの(14)、焼き歪みが強い破片(15~18)等、いずれも商品としての搬入に疑問があるものを集めた。これらは、先述の土師質土器の集中する地区から得られた資料である。

瀬戸・美濃焼 PL. 10 第8図 挿図 2

灰釉製品は、各種の皿が主体で、碗(40)、片口鉢、香炉等を伴う。皿の見込には、印花が押され、菊花、カタバミ、タチバナ等が認められる。

鉄釉製品では、いつものように天目茶碗が主体である。第8図42は、腰の丸い、口縁へ開いた鉄釉の香炉で、初見のものである。全体を優れたロクロでひ



挿図2 瀬戸・美濃焼製品

き、底は糸切り、3足をはりつけている。釉は濃い黒褐色で、腰までかかる。43は茶褐色釉の瓶で、底の大きい舟徳利風の器形である。腰以下は露胎で、鬼板の化粧がけが底までかかる。底はへら切りである。内面は露胎で、弱くロクロ目を残す。PL. 10-37は小杯で、高台削りは天目茶碗に共通する。腰も同じで、へら削り後、鬼板で化粧がけされる。38は、肩の落ちた小壺で、内外面に鉄釉がかかる。腰以下は露胎、段をつけた底部は糸切りのままである。39は水滴で、小さな耳と注口がはりつけられているが、注口は貫通していない。底は陥没しており、糸切り痕を残す。この3点は一乗谷では比較的少ない器種である。

これ以外では、図示できなかったが、2個体の鉄釉四耳壺が注意される。特にその中の1点は、非常に優れたロクロ技術で端正にひかれ、上手の祖母懐の茶壺と思われる。

瓦質陶器 第8図44~47

小形の香炉が多く、いずれも円形、菊花、菱形等の押印を胴にもつ。特に44と45の押印は同じものが「サイゴ寺」出土例にも認められる。器形は筒形のもと、口縁が外に肥厚するものがあり、どちらも削り出しの3足をもつ。

信楽焼 P.L. 10 第8図48

松垣文をもつ壺の肩部破片である。珪石の吹き出しの少ない、鉄分の多い土で、茶褐色によく焼き締まっている。「蹲」と呼ばれる、信楽焼独得の小形壺であろう。一乗谷内からは、これまでも信楽焼と推定される壺が数個体認められているが、大形の壺が主であり、本例は、出雲谷出土の水指と共に貴重な例である。

残り漆入りの椀 P.L. 10-53

口径12cm程の椀に入れられた使い残しの漆が固化して、椀形が保存されたもので、椀本体は残っていない。漆は見込部分で厚さ0.4~0.5cm程に層をなし、肉眼による観察でも、15~20層を識別でき、長期間、大量の漆が使用されたことがわかる。「漆は下地漆で、このように大きい器に多量に使うのは、職人のようにかなり専門的に漆を用いる場合である」との沢口滋氏より教示を受けた。一乗谷では過去の調査により、使い残しの漆がカワラケに少量残存していた例があり、この場合は「サビ漆」であることや、量等から、一般に見られる磁器や硯等の接合修理に用いられたと理解してきた。

スサ入焼土塊 P.L. 9下段

土師質土器を大量に出土した同じ層より伴出したもので、10~20cm大の塊が多い。少量のスサと砂を粗く含んだもので、原形や原位置は不明である。採集された量は、コンテナバットに2坏程度であるが、未発掘部分にもまだ認められる。これらの破片は、全体に火を受けて内部まで赤いが、特に原表面と考えられる部分は、暗紫色で強く熱を受けていると観察される。また、P.L. 10に見られるように、窯体の狭間又は、窓と推定できる丸い曲面をもつ部分も認められ、何軒かの武家屋敷やサイゴ寺等で出土した通常の建築の壁体とは異なる。

この観察は、土師質土器の項で述べたように、①従来の調査による器種の法量や組成と著しく異なること、②小形皿の出土量が非常に多く、又、油痕やタール痕をもたない個体が大半を占めるらしいこと、③ミニチュア品や重んだ粘土板、焼き重み品等、搬入されてくる商品とは考えられないものが認められること等と呼応して、この場で土師質土器の生産が行なわれていた可能性をもたせる。

また、前述した残り漆のあり方の問題も加えて、「瓢町」（ふくべまち）という一乗谷にあっては特殊な地名をもつこの一画において、かなり専門的に土師質土器の生産や、漆に関連した生産にたずさわっていた職人、工房の存在を問題として提起できる。今後の本格的な資料整理の結果によっては、こうした一乗谷、城戸内の構造そのものを再検討する必要があるだろう。

第19次調査 (城戸ノ内共同墓地用地)

第19次調査は、福井市城戸ノ内町字八地谷43-1番地の城戸ノ内地区共同墓地造成申請に伴う事前調査として、昭和51年8月2日から同月4日にかけて実施した。調査面積は、396㎡である。

調査地は、遺跡の中央西部に開口する八地谷の奥部南麓に位置する。この付近には、小さな屋敷跡と考えられる平坦地が階段状に群在しており、調査地もその一面にある700㎡ほどの平坦地で、かつては水田となっていたらしいが現在は杉林となっている。

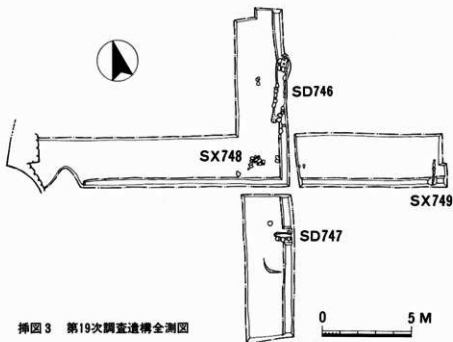
水田として開田されたため、遺構は大半が削平されており、所々にわずかにその残部がみられるにすぎなかった。検出した主な遺構は、石組の排水溝2、集石1、石列1である。

SD 746 調査地区北部で検出した南北方向の石組溝。南から北に流れる溝で、南部はすでに削られ、北は調査地区外にのびていたため、3.8m分のみ検出した。幅30cm・深さ20cmで、20cm長の石を側石に使用した溝であるが、西側石の大半は抜きとられていた。

SD 747 調査地区南寄りにある東西方向の石組溝。幅20cm、深さ20cm。東は調査地区外にのびていて全規模は不明。1m分のみ検出した。

SX 748 調査地区中央にある径20cmほどの自然石の集石遺構。性格は不明。

SX 749 調査地区東端部にある南北方向の石列。15cm長の石を1列に並べたもの。性格不明。遺物は、染付、白磁、土師質小皿の細片が少量出土したのみで、みるべきものはなかった。



挿図3 第19次調査遺構全測図

第20次発掘調査 (出雲谷)

第2次5ヶ年計画の最終年度は、下城戸及びその周辺を明らかにすることを、その目標の1つにしていた。しかし、下城戸は民家と接しているため発掘調査ができず、字名出雲谷にある武家屋敷跡を選んだ。この地はやや高台になっており、旧河川敷だった水田面とは約3mの比高差があり、下城戸とも近く、軍事的にも重要な位置を占む。出雲谷とはこの武家屋敷裏側(東)の谷をさすが、『朝倉始末記』によって「出雲」なる人名をさがすと「魚住出雲守」と「朝倉出雲守」を見出すことができる。なお春日神社所有の古園には、発掘調査地区にあたと推定される所に「魚住出雲守」とかかっている。

発掘調査は、福井市城戸ノ内町字出雲谷2～4番地について昭和51年8月11日から昭和51年12月20日まで行い、調査面積は2200㎡である。

発掘された遺構 PL. 12・13・14 第9・10図

今回の調査では、礎石建物3、掘立柱建物1、石組溝15、石積施設3等が検出された。しかしほぼ全面にわたって削平されており、遺構の残存状況は悪かったが、第I(古)第II(新)の2時期に分けることができた。

以下それぞれの概要について述べる。

SB 750 第II期の東西1間(6.7m)、南北6間(12.5m)の掘立柱の建物である。東西方向は6.7mもあるのに柱間は1間しかない。精査したにもかかわらず、棟通り柱穴は検出できなかった。従って最初からなかったと考える。また、南北両端間と北方2間を除く、中央3間の東西方向柱通りは不ぞろいで、各柱間寸法もそれぞれ異なった値を示すが、建物であったことは間違いない。柱根は8本残っており直径が20cm程度の丸柱で、材はケヤキかブナと推定される。柱穴の大きさは直径80～90cm、深さ80～90cmである。柱穴の掘方内は焼土や灰で埋られていた。大部分が削平されているので、SB 750が、屋敷内で最大の建物とは言いつてもいいが、15次調査で検出した礎石建物SB 405とほぼ同じ規模であったことは注意を引く。

SB 751 南北4間(4.7m)東西2.5間(4.8m)の礎石建物である。削平されて礎石は5個しか残っていないが、礎石抜き跡を検出することができた。従って柱間寸法は推定だが、194cm(6尺4寸)を単位と考えることができる。西側については、SB 751のための盛土が後世に削り取られた形跡がある。礎石建物SB 715には、石積溝SD 754とSD 760が廻っている。SB 751とSB 756とは層序から同時期に存在した建物と考えることができるが、SB 750の地盤が20cm程高く、桁行方向で約2°のずれがある。

SB 752 発掘区南側に検出された第II期の礎石建物であるが、残存状態が悪く規模等は全く不明である。現存する限りでは東西7.2m、南北5.7mを測る。なおSB 752に伴う溝等は一

切検出されなかった。

その他S X 789やS X 792のように、礎石と考えられる石が分散して残っているが、規模や方向等は全く不明である。

SD 759 発掘区東端から東西に流れる第II期の溝で幅70cm、深さ40cmを測る。南側には2～3段の石積が残っていたが、北側にはそれらしいものは検出されなかった。先行については不明である。溝は灰の混った細い砂質土で埋っていた。

SD 754、SD 760 いずれも第II期のもので、礎石建物S B 751をとりまく石組溝である。石積は自然石を積み重ねただけの乱雑な積み方である。SD 754は南側ではS B 751に平行だが、東側では東南方向に10°開き、SD 760も西北方向に開いている。SD 754が、S B 751と方向が一致しない点については、S B 751の西方でその下層に十字の線刻が入った礎石列S B 806があり、この下層の建物S B 806にSD 754がほぼ平行していること、またこの溝がS B 750の下層の溝SD 756を合せていることからSD 754は第I期からのものであろう。SD 755も第I期からの可能性がある。

S X 777 S B 751の北にある東西方向の石積遺構である。自然石を2～3段積み重ねたものでS B 751の方向と一致する。S X 777の両端近くで胸頭を検出した。下半分が埋め込まれており、東から来た水を上にあげるためのものである。なお胸頭の所にSD 769がつく。

S X 800 1.7m×1mの石組内に小砂利を敷きつめたもので、側石は立ててある。第17次調査でも、S B 523に接して検出されている(S X 536)。溝のそばにあり、水を使用する何らかの施設であろうか。

SD 761、SD 762 ほぼ東西に流れる第II期の石組溝で、SD 761とSD 762は現状では削平されて離れているが、もともとはつながっていたと考えられる。

SD 757 発掘区南端を東西に貫いて流れる第II期の石組溝で、東南隅で南に曲っている。西半分は石が全く残っていないで溝底がわずかに検出された程度であった。東南隅の残存している石組から、屋敷内の溝に使用されている石よりも大きく溝も幅4.5cm、深さ40cmと大きい。この溝はあるいは屋敷の南側を限るものかもしれない。

S F 770 現存では3.5m×2mの第II期の石積遺構である。長さについては不明で、深さは約40cmを測り面の整った自然石を使用して2段程積んでいる。これまでに検出された石積遺構とはやや性格が異なると考えられる。

S B 753 第I期に造営されたもので、発掘区のほぼ中央1間(1.7m)×2間(3.8m)の小さい礎石建物である。礎石建物としては規模は小さすぎるので、北側へ延びる可能性がある。

S F 769、S F 771 石積遺構で、S F 769は3m×3mとほぼ正方形で上面は削平されている。焼土や灰で埋っており、木の皮に金粉を塗った小片が出土した。S F 771は2m×1.2mの大きさで、中はこぶし大の石で埋っていた。いずれも第I期の遺構である。

SD 765 やや大きい石を使用した第Ⅰ期の石組溝で南北に流れる。残存長は4mを測り、つけ替えの跡が見られる。

第Ⅰ期の遺構は第Ⅱ期の遺構や後世の攪乱によって部分的にしか残ってなくて、全体像をとらえるには至らなかった。

発掘区は台地だったが、台地下の河川敷と考えられる所に川まで東西トレンチを入れた。台地の斜面には石垣はなく、堰に石が並んでいただけであった。トレンチ内で検出した遺構は石組溝SD 767と礎石建物の可能性もあるSX 805である。そのすぐ西側は50cm程低くなっており、道路かとも考えられる小砂利敷が検出された。しかしさらにその西側は小砂利敷とはほぼ同レベルながら砂が堆積していて河川敷だったことを示しており、小砂利敷が道路跡とは断言できない。

以上の調査の結果、ほぼ全面にわたって削平されていて、屋敷の規模や建物の構成など不明な点が多かったが、かなりの規模の掘立柱の建物が検出されたことは、中世建築の多様性を示すものとして注目される。

発掘された遺物

出土した遺物は、越前焼、土師質土器、瀬戸・美濃製品、中国製染付、白磁、青磁、金属製品、石製品、木製品等である。全体に出土量が少なかった。

越前焼 PL. 15・16 第11・12図

越前焼はこれまでの調査と同様、日常雑器として壺、甕、播鉢、鉢が出土した。

壺は7種類程出土しているが、56は、胴部に貼付突帯を有する短頸壺である。なで肩で胴部が強く張っている。胴部の中程よりやや上に最大径がある。肩には刻印がある。作り、焼成ともに悪く十分焼き締っていない。口径18.5cm、高さ23.5cmを測る。57は、同じく短頸壺で肩が張り胴部はややゆがんだ筒形になっている。口径8cm、高さ15.4cmである。59は、徳利で、口縁はラッパ状に開き頸部はやや短く、体部はずっしりとしている。高さは27.8cmである。17次調査でも、同じ器形で小形のものが出土している。

播鉢は多数出土している。68は、口径41.5cm、高さ18.5cmで、口径の割にやや深く、口縁の端部に凹線が廻る。播目は12本単位で間隔が大きい。胎土はやや砂質で焼成もよい。付高台はないが、新馬場出土例のように古様をとどめている。69は、浅い皿に播目をつけたものである。

鉢では、播鉢と同じ形で播目がないだけの(66)と内湾したもの(63)とがある。後者には深いものとやや浅いものとがある。64は、やや異形で腰部がふくらみ口縁部が外反する。よく焼き締っており茶褐色を呈する。内側に十字の刻印がある。

60は、口径21.6cm、高さ26.6cmを測り、口縁がやや開いた筒形をしている。火を使用した

ような跡はみえないが、火桶と考えられる。ほぼ同じ大きさで口縁が内湾した例(61)もある。

土師質土器 PL. 15 第13図

土師質皿では、A・B・C・Dの各類が出土している。A類は数点見出せるだけで、B類は肘を押しあてて作ったものと、いわゆる手づくねのものとかがある。C類では口径が9cm(3寸)を中心としたC₂類が多く、D₁類は10cm(3寸3分)、12cm(4寸)としたものが多い。D₂類では口径が25cmをこすものもある。

土師質羽釜は10数個出土しており、口径の数値に多少のバラツキはあるが、今回の出土例では12.5cm(4寸)と9cm(3寸)を中心とするものが多い。羽部から底部にかけて煤が付着しており、実用に供されたことは間違いない(85)。

その他、土鈴、耳皿、丸皿等が出土している。

瀬戸・美濃焼製品 PL. 17 第13図

天目茶碗では、口径12cm前後の普通の大きさのものも多く、50個体近く出土している。高台の削り方によって2つに分けられ(高台裏を平に削ったもの9点、凹めて削ったもの4点)、前者は全体に丸みがあり、後者はやや直線的で口縁下のくびれが強い。また高台がやや高く、高台裏の削りに深い例もある。他に口径7.5cm程の小天目も3個体出土している。茶入れ(89)は高さ5cmで、普通のものよりやや小さい。底部近くには洗鉄を塗り、上部には天目釉をかけた徳利や、大きく開いた鉢も出土している。

灰釉皿の出土量は少なく、口径15cm程で、見込みにカタバミの印花があるもの(90)、同じく9cmで、外側に退化した蓮弁を線刻で表わしたもの(91)が出土している。この他底は糸切りのままで、外側は軸が腰部までしかかかっていない例もある。92は、染付の写しと思われる坏で、口径7.2cm、高さ3.2cmを測り、一乗谷で出土する染付杯よりもやや大きい。また青磁碗の写しも出土している。

その他、国産の焼物では信楽の水指かともみえる破片が出土している。

中国製陶磁器 PL. 18 第14図 挿図4

染付碗は、外側に樹下人物の図と雲に人物の図を、見込みには人物の図をややくずれた絵ながら手なれたタッチで描いたもの(93)や、内側口縁下に蔓垣文を廻らし、見込みに菊花を二輪描き、外側は口縁下に一条の青線を廻らしただけで、残りの白磁には宝相華らしい暗花を描いたもの(94)が出土している。その他、腰部に蔓唐草文がめぐるもの、口縁下に雷文を廻らしその下に宝相華唐草を発色のよい呉須で描いたもの、見込みにのみ人物像や草花文を描いたもの、パシヨウ文の碗等があり、これらの高台裏には「萬福攸同」「長命富貴」「天下太平」「大明年造」と書かれた例が多い。

皿では、口径が12cm前後で見込みに菊花のような十字文を配し、外側に宝相華唐草を廻らしたものと、見込みは羯磨の形をとどめた十字花文で、外側は唐草文を小さく密に回転さ

せた例が多く出土している。その他、碁笥底で外側にバショウ文を描いたものや、見込みにくずれた獅子とまりを描いた皿等が出土している。また、見込みに吉祥字の「寿」と「福」を組み合わせて一字のように書いた例(95)もある。

白磁皿はⅢ類あり、高台から腰部がふくらんで立ちあがり、端反りのもの(96)、高台からは直線的に開き、端反りのもの(97)、碁笥底のものがある。



挿図4 染付碗

Ⅰ類は口径12cmの大きさのものが最も多く(105個体)出土しており、それよりやや大きい口径16cmの例もあり、25個体出土している。底部には墨があるものもある。Ⅱ類は少なく16個体しか出土していない。

今回の調査では、白磁の環が多く出土した。98は、口径7cm、高さ2.8cmで小さい高台がつき、見込みの中心を残して円く軸をふきとっている。口縁部は輪花になっている。高台裏に墨の吉祥字が入っている例がある。

青磁碗は23個体出土しており、そのほとんどは銘文が変化した線刻による蓮弁をもつものである。高台裏は重ね焼きのため軸をふきとっている。見込みに印花があるものもあり、軸の色も青味がかったものから褐色に近いものまで様々である。Ⅲ類では、口径が16cmとやや大きい桜花皿が2～3個体出土している。内開口縁近くにへら描きによる草花文が廻っている。その他、高台裏が白磁釉の菊皿もある。100は、厚手の鉢で口径21cm、高さ10.5cmを測る。しっかりした作りで、一部火を受けて荒れているが深い緑色に発色している。口縁下に一条の沈線が廻っており、高台裏は釉がふき取られて露胎になっている。

石製品 PL. 16 挿図5

石製品は火炉、盤、建築材、一石五輪塔、硯等が出土しているが、硯の他は福井で産出する笏谷石(火山礫凝灰岩)である。104は、火炉(バンドコ)で平面形はD形をしており、正面に4個の窓(同じ大きさのものから推定)が開いている。内側後壁の中ほどから上には火を受けた跡がついている。これをさらに木製の箱に入れて使用したのであろう。

金属製品 PL. 17 挿図5

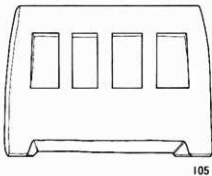
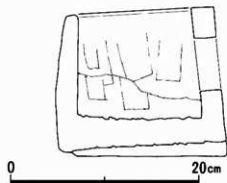
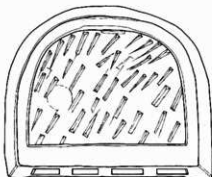
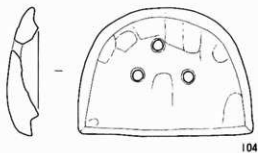
金属製品は和鏡、提子、包丁、火箸、金具等が出土している。102は、直径5.5cm(1寸8分)の小形鏡である。鈕は亀形鈕で、縁高は4mmで直角に立ちあがる。文様は2羽の雀と菊、桔梗が鑄出され、秋草双雀文鏡と考える。103は、口径6cm、高さ4.2cmの銅製提子である。口縁は内側が厚くなっていて、銅製の弦がついている。大きさからして酒会用ではなく、油桶に使用

したものであろうか。火箸は鉄製のものと、銅製のものとがあり、鉄製の火箸は一对で長さ32.5cmである。断面は円形である。銅製の火箸はやや短く24cmで断面は方形である。

木製品 P.L. 17 挿図5

木製品では、漆の椀、鉢、箱、箸、建築材等が出土した。101は、小形の漆皿で、口径9cm、高さ2.5cmを測る。内側は朱漆で外側は黒漆地に朱漆で草花文様を描いている。鉢は土圧のため大きく歪んでいるが、口径15cm、高さ6cmを測る。外側に黒漆を、内側に朱漆を塗ってあり、朱漆で小さい円を多数描いている。この種の鉢が、数個体出土した。漆の蓋も出土しており、黒漆地に丸に下り藤の蒔絵が施してある。この蓋は、他の漆製品に比較して格段に品質がよい。

建築材としては、屋根を葺く柿板が多数出土した。大きさは長さ60cm、幅6cm、厚さ3mm前後のものが多い。材質は桧と思われる。その他板類も多数出土した。



挿図5 101 漆 皿 102 鉢 子 104・105 バンドコ

整 備

昭和51年度は、寺院跡（サイゴージ）2300㎡を、請負工事で芝張や花木の植栽、アスファルト・ソイルセメント・砕石・砂利などの舗装をし整備するとともに、アルフォート板製の説明板・花崗岩製の説明石柱を設置した。また館跡前1355㎡に、直営工事で芝張・花木などの植栽をし休憩緑地を造成した。

寺院跡（サイゴージ）整備工 PL. 19・20 第15図

第17次発掘調査地の寺院跡を整備した。建物跡は、およそ3つの時期にわけられるが、中央の南北溝を境として、西側にはⅢ期の建物跡がよく残っていたので、下層で検出したⅠ・Ⅱ期の遺構を埋戻し、上層のⅢ期の礎石をそのまま露出して整備した。東側にはⅡ・Ⅲ期の建物跡がよく遺存していなかったため、Ⅰ期の建物跡をうめもどし、真上にその規模を表示した。建物の時期を区別するため、舗装材料をかえた。西側のⅢ期の建物跡は、黒色のアスファルトブロックで縁どりし、内部は砕石基礎にアスファルトで舗装し、東側の下層の建物跡は、茶色のアスファルトブロックで縁どりし、内部はソイルセメント基礎に珪石を舗装し整備した。建物跡の周辺は、中央の南北溝の西側はソイルセメント基礎に細砂利をしき、東側は埋戻し高麗芝を植栽して整備した。

土塁は石垣を補修し、上面に盛土芝張をした。石植施設、溝は側石を補修、底にソイルセメントをうち整備したが、遺構の天端の位置が低く、整備し上うめる必要があるものは、埋戻し真上にその位置や規模を表示した。寺院跡の外の、南側の道路跡は、部分的発掘により位置が確かめられたので、埋戻し未発掘部分も含めて、上面に延長40mを復元表示した。図の黒色の石垣の石、礎石などは、新しく補充、また積み変えた部分である。

遺構のないところには、觀賞と緑陰をかねて高木のアカマツ、ケヤキ、ヤマモミジ、コウバイ、ヤマザクラ、ハクモクレン、ツバキを、また低木のユキヤナギ、ツツジ、サツキ、ハギを要所に植栽した。

井戸枠は、発掘資料に基づき、同じ材料の笄谷石で3基を復元設置した。なお遺構説明、案内のためにアルフォート板製の説明板1基と、遺構表示用石柱を13個作製し設置した。

園路工 町並復元地区と寺院跡整備地区を結ぶ見学コースの設定のために、延長184mの園路を造成した。幅1mの通行部分はソイルセメントで舗装し、その両側に玉石を伏設した。

館前植栽芝張工

館跡の西南側に芝生地を造成し、従来の芝生広場をさらに拡張した。芝生には高麗芝を使用した。南側の50cmほど盛土した330㎡には、芝張をするとともに、緑陰や觀賞のため、高木のアカマツ、ヤナギ、カエデ、ケヤキ、サクラ、低木のヤマブキ、ハギを植栽した。

『庭訓往来』の断簡

1970年夏、福井市東新町字鍋屋3番地付近から、西田保氏父子は、提子・水滴様のもの・漆塗の下駄などと共に墨書のある紙片を、ほとんど灰に近い状態で発見された。その後西田氏から保管の委託を請けた当研究所は、早速県警察本部鑑識課に相談し、幸いその好意によって写真撮影に成功した。その写真を東京大学史料編纂所の桑山浩然氏に見て頂いたところ、『庭訓往来』の断簡であるとの御教示を得たので、その概要を紹介したい。

紙片は約38片ある。およその順に並べ、各紙片毎に①～⑳の番号を付して以下にその文字を示したい。(文字の上の・印は推定文字、|印は行の別を示し、判読不能の文字・欠如部分は□、□印を補した。前欠・後欠は示さない。)

- | | |
|----------------------------|-------------------------------|
| ①覆虎皮 鞭差繩等爲御 行(六月状返) | ②時□敬白 兵部照 返事(六月状返カ) |
| ③依令奔走東(七月状往) | ④箱 帽子直垂 胡録(同) |
| ⑤下也恐惶謹言 衛門(同) | ⑥裏裳 七條裳横尾 具如(七月状返) |
| ⑦帽子直綴 唐繪一對横笛 方(同) | ⑧啓案内之条 等閑只自然 讞田舎(八月状往) |
| ⑨樂可被察 行候歎所領安堵 冬(同) | ⑩規式 例律令武家 雪鐵(同) |
| ⑪法例引 者可尋明也右 者(同) | ⑫事如 事人々攘災所 所被(八月状返) |
| ⑬政道詆 御在洛之費也 舉状(同) | ⑭窮屈更無 賦閤閣重軸 訴人(同) |
| ⑮召符就違 番三問答訴 非奉(同) | ⑯下使者召文調 年々評定管領 就探(同) |
| ⑰殺害山 傷打擲蹴躑 也管(同) | ⑱流帳此 其人是非被行 舉達(同) |
| ⑲其軀始令 路次者八葉御 上人前(八月状單) | ⑳陳頭 衣白直垂布 驚□家文(同) |
| ㉑相並弓手妻 調樂伎翻羅 人者打(同) | ㉒神主者 着解經紐於玉(同) |
| ㉓令參仕言上之 令辦忘(九月状往) | ㉔改悔之 大法會候拜請 日唱導度(同) |
| ㉕書写御經轉 秘法唱誦陸羅 九旬供(同) | ㉖人等接 但但仏布施并 御助成(同) |
| ㉗謝者也唱導 興可給御迎也(九月状返) | ㉘義式歎可有法 道名(同) |
| ㉙卓机臨時之纏 様兼日可被 限只得(同) | ㉚時恐々謹 侍(九月状返カ) |
| ㉛仁定令存 家堂頭和尚 監寺(十月状往) | ㉜管都聞 方者前後堂 燒(同) |
| ㉝主院主執當 僧都法印僧正 業内供(同) | ㉞都維那 外有職僧綱僧 相伴羅書之(同) |
| ㉟事期參拜之次候 沙 師御寮(同) | ㊱事難 無可然之仁候之間 布施物事被物(十月状返) |
| ㊲布筋匙木綿 香 (同) | ㊳求法被 布施也点心者(同) |

伝経覚筆『庭訓往来』(室町中期筆)よりは、『庭訓往来註』(室町末期筆)により近い型を示すが(石川松太郎校注『庭訓往来』平凡社刊)、両者とも異同がある(×印の部分)。

書体・伴出の遺物から考えて、戦国時代の『庭訓往来』の一写本の断簡と考えられる。

研 究 所 要 項

I 事業概要

1. 研究事業

- イ、朝倉氏遺跡発掘調査
第18次（瓢町）、第19次（墓地予定地）
第20次（出雲谷）

- ロ、朝倉氏遺跡環境整備
サイゴ寺跡、本館前芝及び樹木植栽

- ハ、古文書調査

2. 外部調査指導

- イ、柚山城跡（南条郡南条町）
1976年4、11月 藤原、小野、吉岡

- ロ、桑島館跡（石川県白峰村）
1976年7、8、9月 河原

- ハ、塩田城（長野県上田市）
1976年6月 河原

- ニ、梅田氏庭園
1976年7月 藤原、小野

- ホ、城福寺庭園
1976年8月 藤原、小野、吉岡

- ヘ、産小屋調査（敦賀市）
1976年8月 吉岡

- ホ、三国町並調査（三国町）
1976年
発掘整備業10周年記念展
1976年10月 岡島美術記念館主催

3. 朝倉氏遺跡調査研究協議会

- 1976年3月15、16日 於 福井
「山城の整備について」
「公園センター建設について」
「資料館建設について」

4. 特別史跡地内現状変更申請について

- 申請件数 10件
主な理由と面積 家屋新築、庭造成等 999.6㎡
発掘、整備、その他 6396 ㎡
計 7395.6㎡

II 予 算

- 発掘調査費 20000千円
環境整備費 10000千円
研究所費 858千円

III 組織規定

福井県教育委員会行政組織規則 抜萃

（昭和46年6月1日
福井県教育委員会規則第5号）

改正 昭和46年12月23日教委規則第12号
昭和47年4月1日教委規則第3号
昭和47年10月24日教委規則第8号

第二節 出先機関（設置名称等）

第13条 出先機関として、支局、へき地、複式教育事務所、特殊教育推進事務所および文化財事務所を置く。

2. 出先機関の名称、位置および所管区域は、次表のとおりとする。

機関の区分	名 称	位 置	所 管 区 域
文化財事務所	福井県教育庁 朝倉氏遺跡調査研究所	福井市	福井市（特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の指定区域）

（出先機関の所掌事務）

第15条 各出先機関の所掌する事務は、次表のとおりとする。

機関の区分	所 掌 事 務 所
	1. 史跡の発掘および発掘技法の研究に関すること。 2. 史跡の環境整備および遺構修繕の研究に関すること。 3. 史跡の出土品の調査および研究に関すること。 4. 中世史の研究に関すること。

附則（昭和47年4月1日教育委員会規則第3号）

この規則は昭和47年4月1日から施行する。

IV 職 員（昭和52年3月31日現在）

氏 名	官	職	
河原純之	教育庁技術職員	所長	考古
藤原武二	教育庁技術職員	次長	造園
水藤 真	教育庁技術職員	文化財調査員	歴史
水野和雄	教育庁技術職員	文化財調査員	考古
小野正敏	教育庁技術職員	文化財調査員	考古
岩田 隆	教育庁技術職員	文化財調査員	考古
吉岡泰英	教育庁技術職員	文化財調査員	建築
吉越 強	事務補助員		



越前焼大甕



第17次調査・遺構



同 整備状況



東
中
西
南
北
向



▲
道路SS 621、
側溝SS 624、
石積施設群

◀溝SD 638及
石積施設群



▲
西主要部遺構
(礎石建物SB 655他)



礎石建物SB 673▶



井 戸 (SE 674 SE 675)
(SE 677 SE 679)



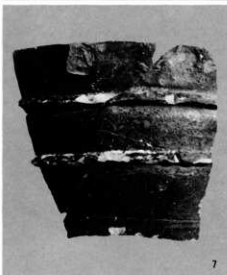
石積施設 (SF 681 SF 683)
(SF 685 SF 686)



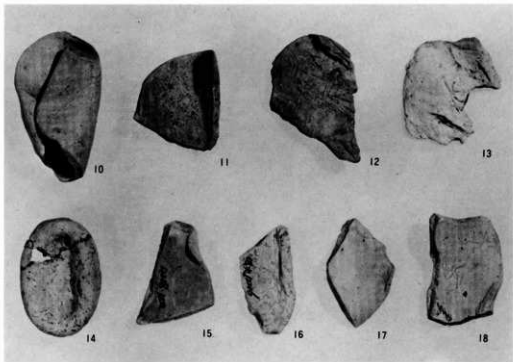
S X 706



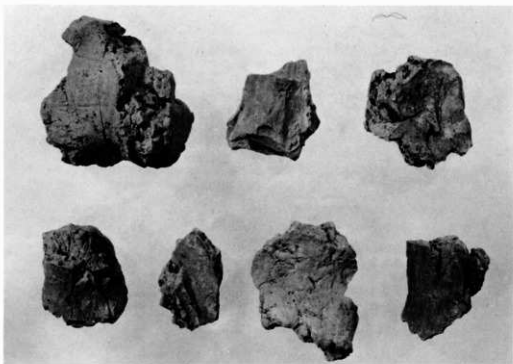
S X 709 S X 710



1、2 越前焼大甕
3、4 越前焼壺
7 越前焼緒桶



土師質特殊遺物



スサ入焼土塊



37



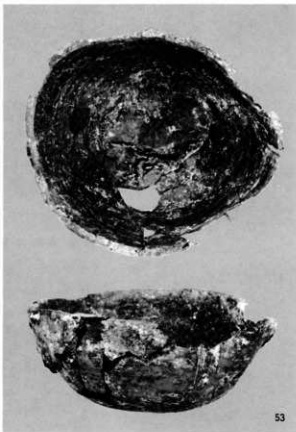
38



39



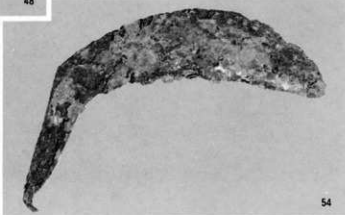
49



53



48



54

- 37~39 瀬戸・美濃製品
 49 漆書銘青磁皿
 48 信楽焼壺
 53 残り漆入り碗
 54 鉄製鎌



全 景 西 南 从 ち



溝SD746 南 从 ち



全 景 北 从 从



東 半 分 南 从 从



建物 SB 750 西から



礎石建物 SB 751 東から



礎石建物 SB 753 東から



上 石積施設
SF 771

右 石組施設
SX 800





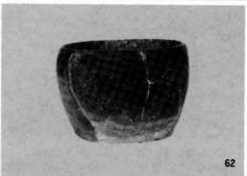
85



56



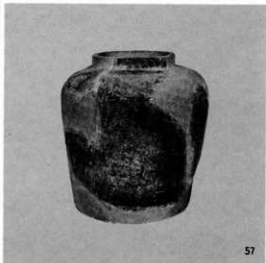
60



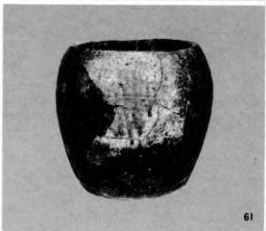
62



59



57



61

85 土師質羽釜
56・57 越前壺
59 越前壺

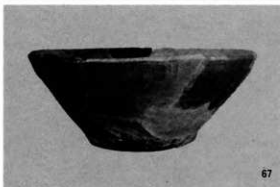
60 越前桶
61 越前桶
62 越前鉢



63



66



67



64



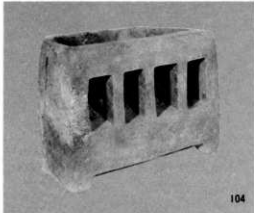
68



65



69



104



103

63~67 越前鉢
68・69 越前播鉢

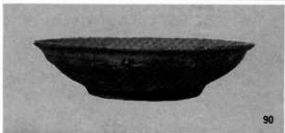
104 バンドコ
103 バンドコの蓋



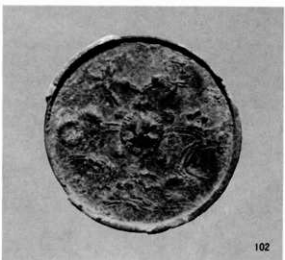
87



88



90



102



89



92



91

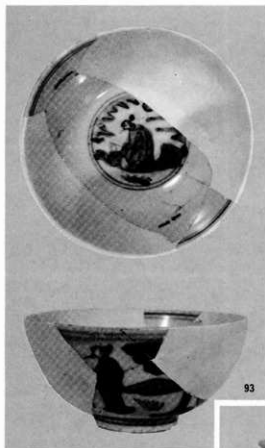


101



103

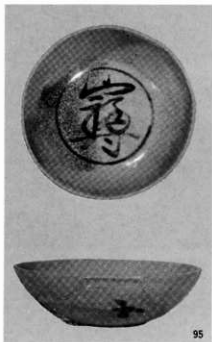
- | | | | | |
|-------|------|-----|---|---|
| 87・88 | 天目茶碗 | 101 | 漆 | 皿 |
| 89 | 茶入 | 102 | 和 | 鏡 |
| 90・91 | 灰釉皿 | 103 | 提 | 子 |
| 92 | 灰釉 | | | |



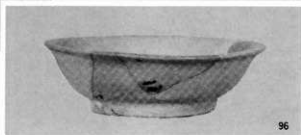
93



94



95

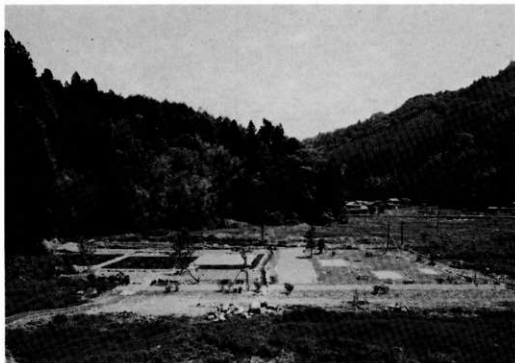


96



100

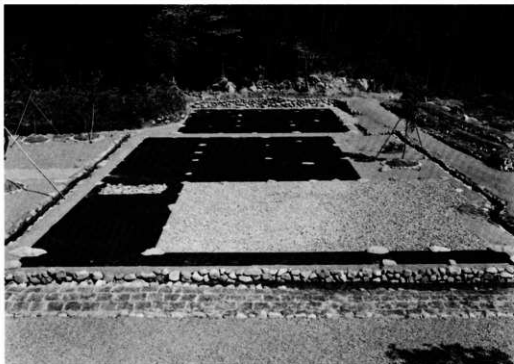
93・94 染付碗 96 白磁皿
95 染付皿 100 青磁鉢



寺院跡整備状況 南から



寺院跡整備状況 東北から



西半部整備状況 東から



東半部整備状況 南から



(8 月 往)



(8 月 往)

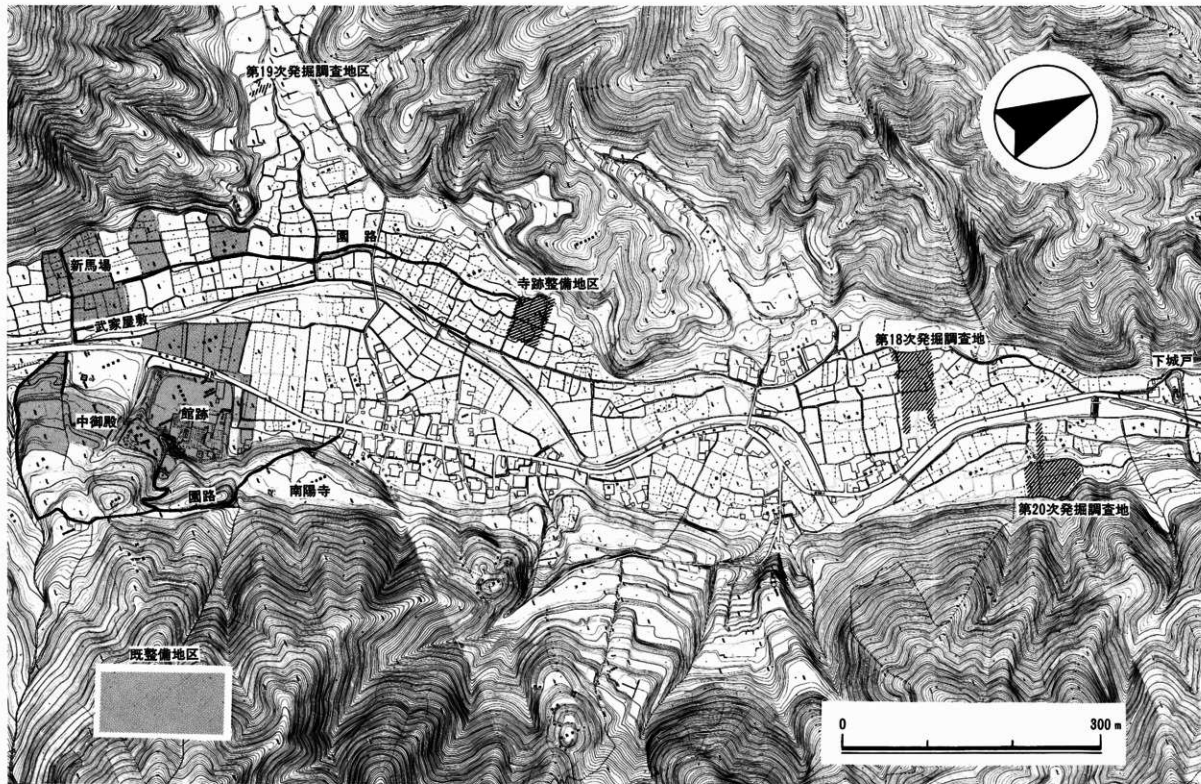


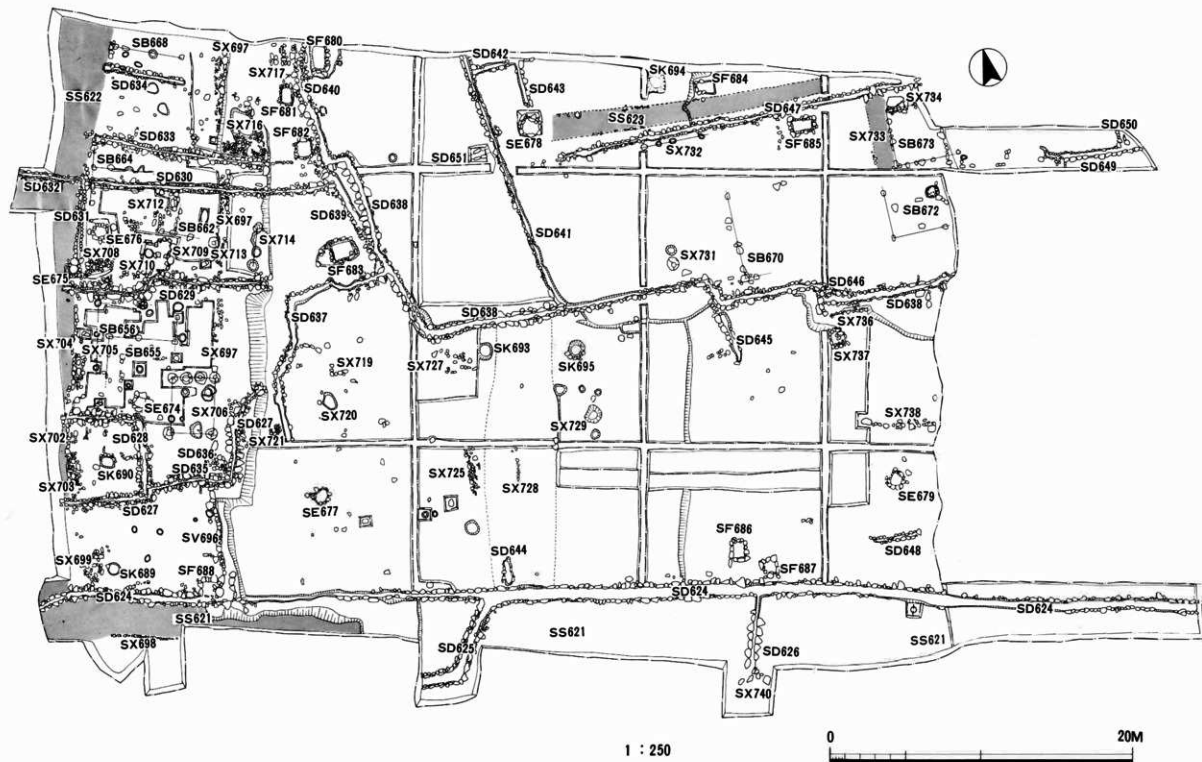
(8 月 返)

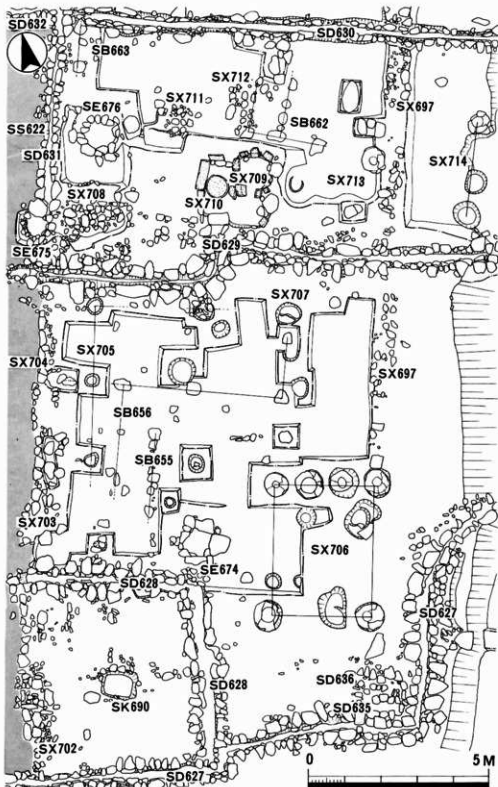


(8 月 返)



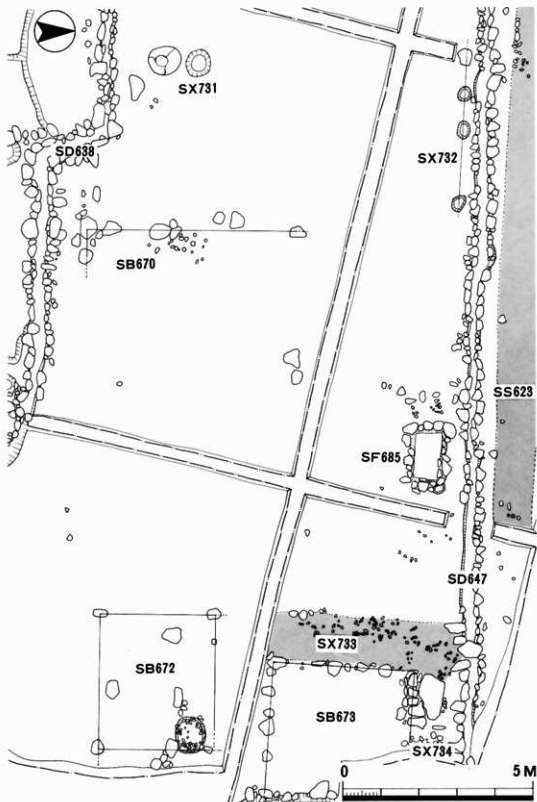


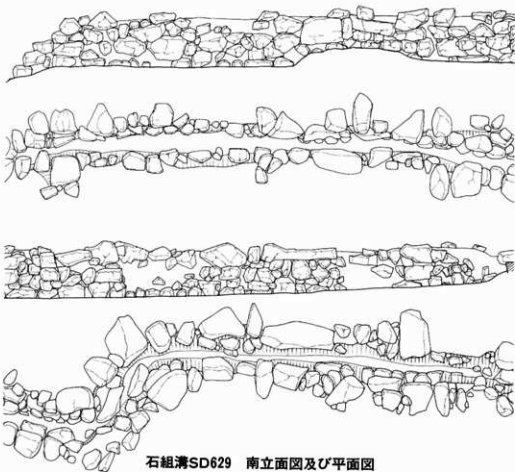


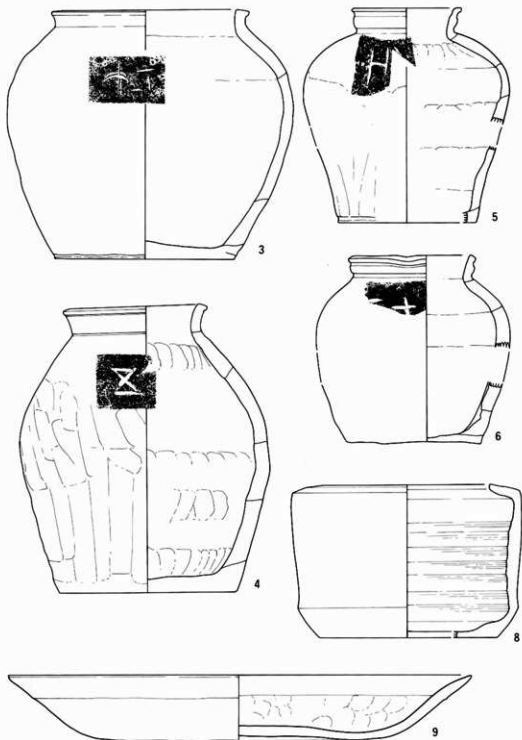


第4図

第18次調査・遺構(3)

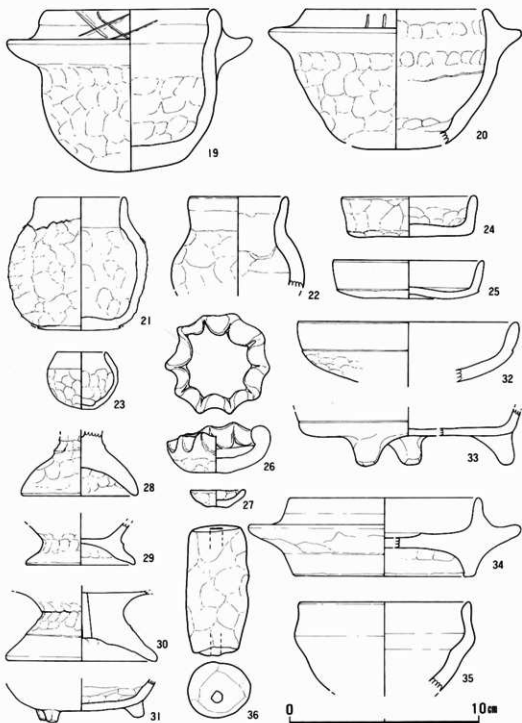






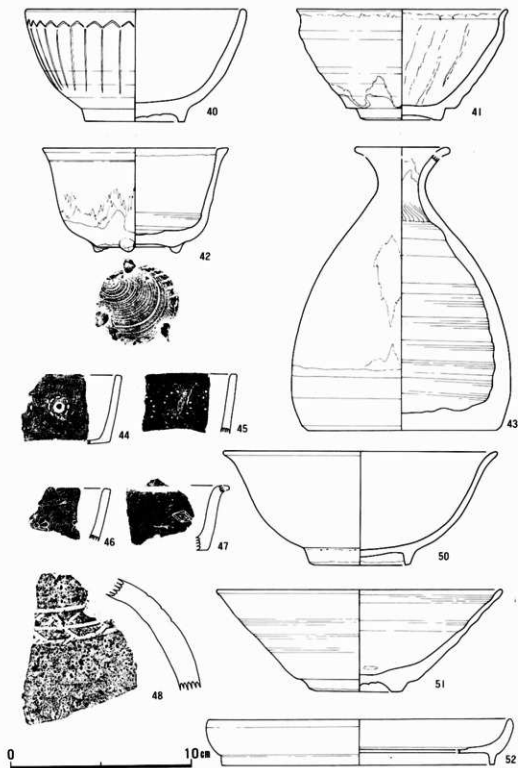
3~6 越前焼壺 8 産地不明 水指か
9 土師質大皿

0 15cm

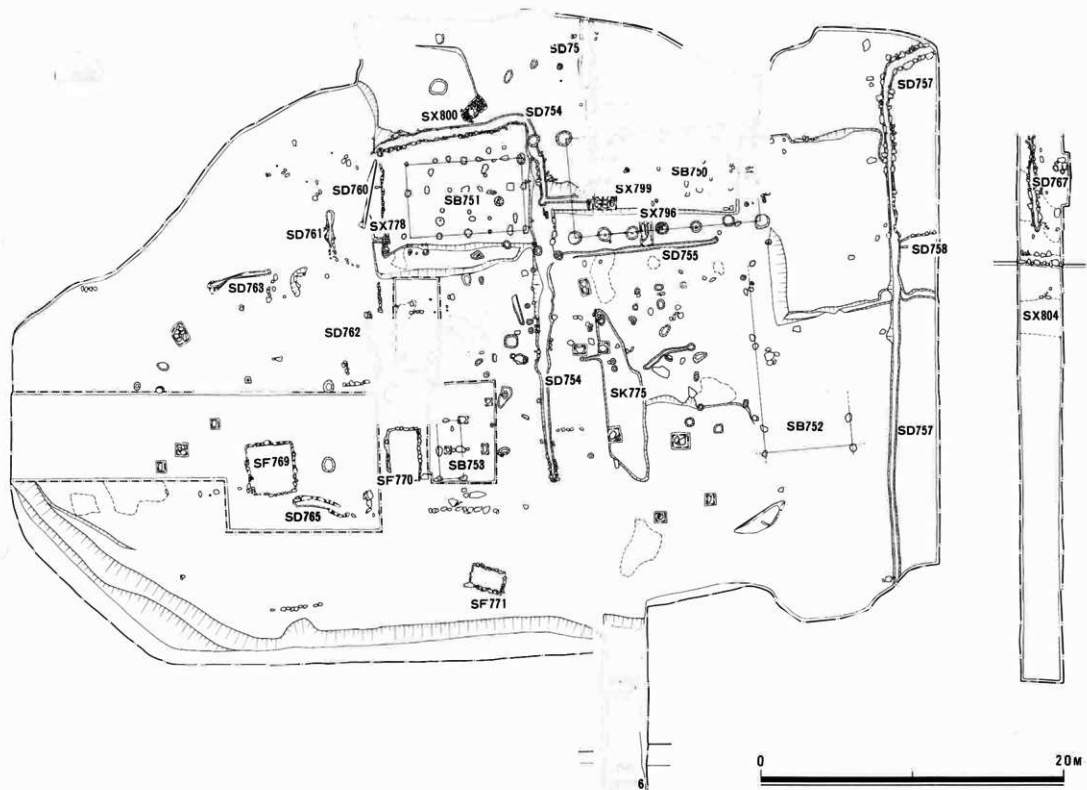


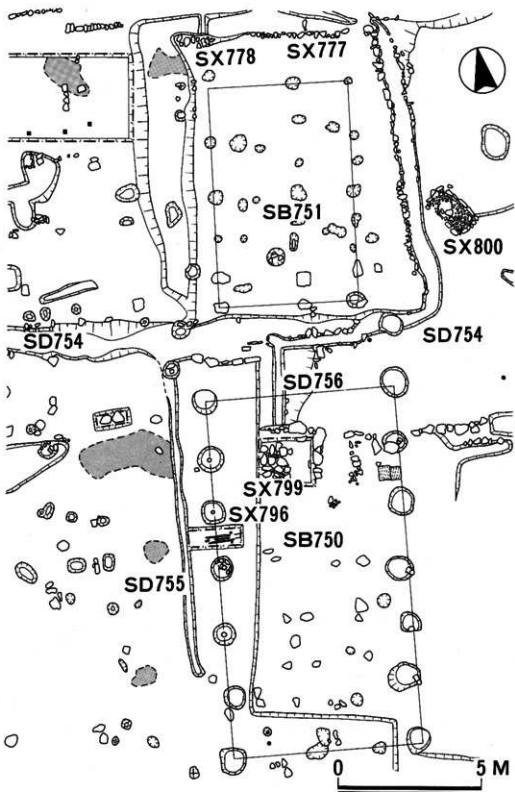
土師質土器

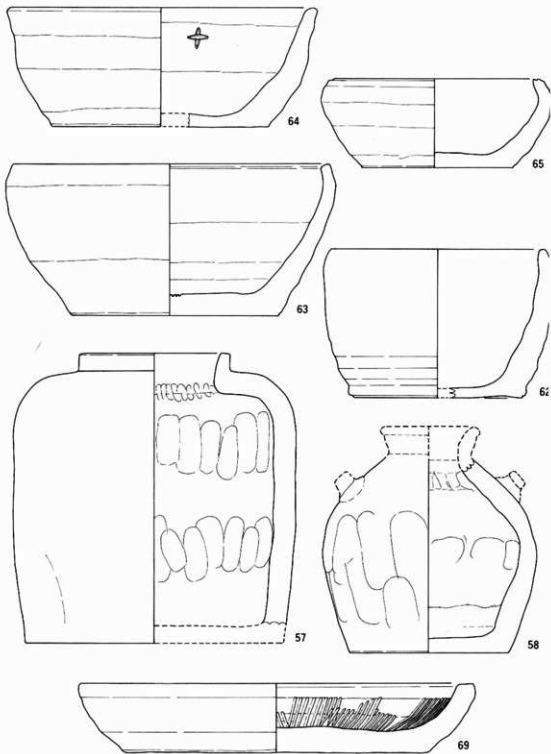
19・20 土釜 21~23 壺 24~27 小皿 28~30 器台脚部
 31・33 3足の部分 34 平箱か 35 埴形 36 土鏝



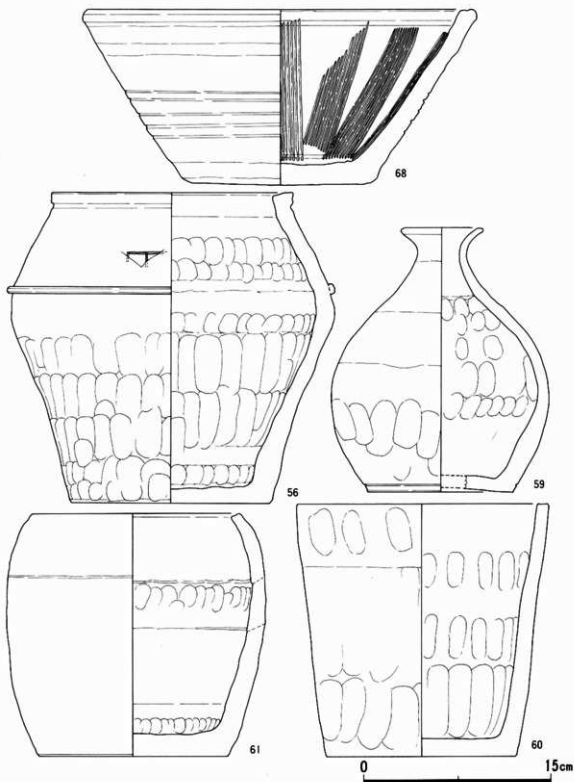
40~43 瀬戸・美濃製品 44~47 瓦質香炉 48 信楽焼壺 50 白磁碗 51 高麗茶碗 52 石製皿







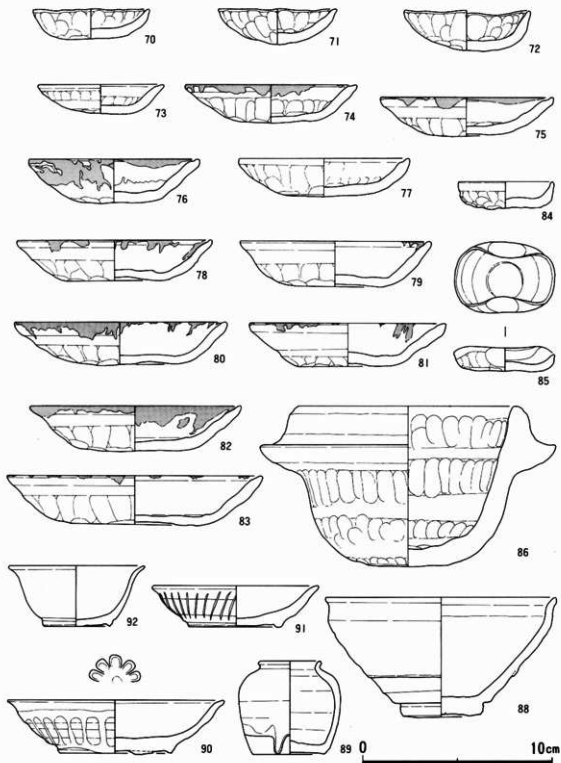
57~58 越前甕 62~65 越前鉢 69 越前浅皿



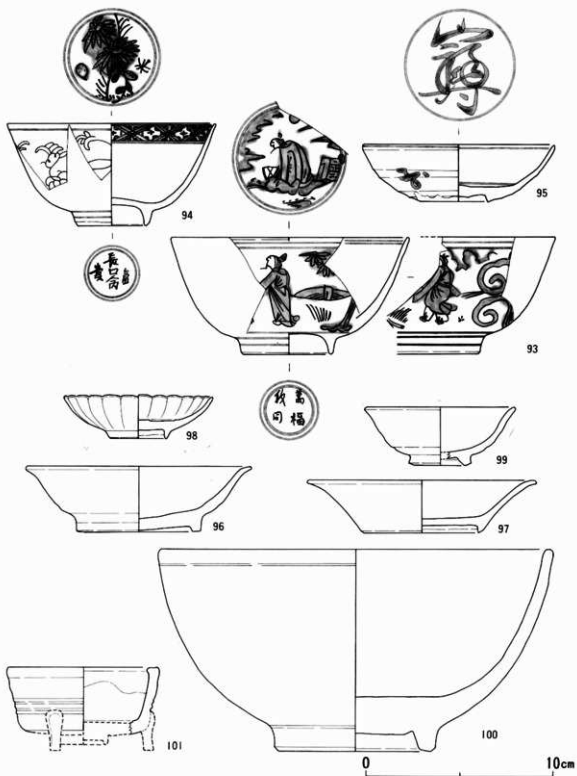
56・59 越前壺 60・61 越前桶 68 越前椀鉢

第13回

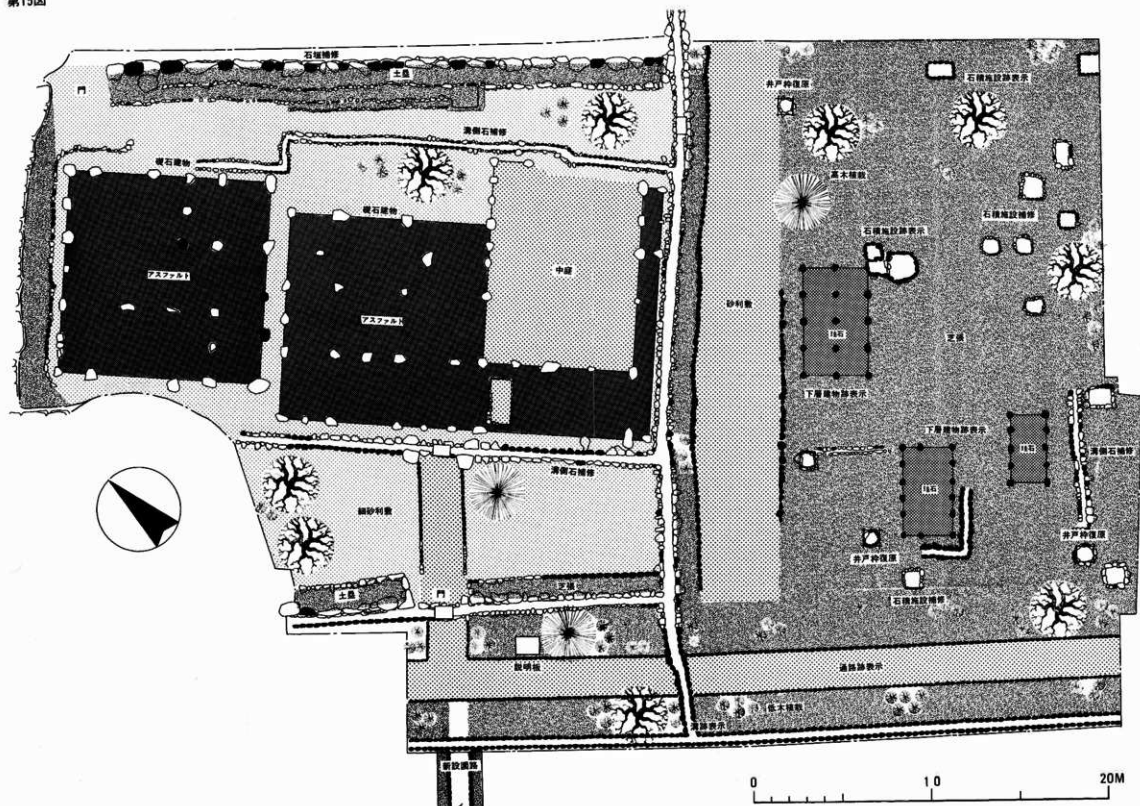
第20次調査・遺物(3)



土師質皿B類70-72 C類73-77 D類78-83 84 丸皿 85 耳皿 86 土師質羽釜 88 天目茶碗 89 茶入
90・91 灰輪皿 92 灰輪坪



93・94 染付碗 95 染付皿 96・97 白磁皿 98・99 白磁杯 100 青磁鉢 101 青磁香炉



特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 VIII

— 昭和51年度発掘調査整備事業概報 —

昭和52年3月31日

編集発行 福井県教育委員会
朝倉氏遺跡調査研究所◎
印刷 創文堂印刷株式会社

無断転載を禁ず